

つわぶき



第39号
平成19年3月発行のを会
編集野史と歴史
津和野自然守

北に新天地を求めて

年末から年始にかけて暖冬と言われている。津和野らしい雪に接する事もなく止まらない春の勢いに圧倒されている。早々と始まった北帰りの報道、雪不足は水不足に繋がりがこの夏が思いやられる。北の国北海道からの便りでも何か忘れものをしたまま春を迎えそうだとあった。

西走、朝廷・幕府・各藩の状況把握、藩への報告、藩主の親書伝達等活気溢れる目覚しい働きが伺われる。

その中の一人山田簡司に関する記述に興味を覚える。

北海道で想起されるのは、新天地に大志を抱き、屯田兵(注1.)として移住した旧津和野藩士山田簡司(永弼)の事である。

簡司は文久三年(一八六三)二十四歳で朝廷の親兵として十名の同僚と共に京都の任務に就く。翌年帰藩し、七月に特使として山口へ、更に十月には福岡へ赴く。翌年九月京都へ、更に翌慶二年には二月より四月まで京都での情報収集。五月には浜田・松江へ。次いで七月には広島・福山・名古屋へ派遣され、翌六十八年(明治元年)には京都へ状況の偵察に赴く。

明治三十七年(一九〇五)年、加部巖夫(注2.)篇「於村呂我中」には文久三年(一八六三)より明治三年(一八七〇)迄、明治維新前後に於ける津和野藩の動きが、克明に然も生き生きと記録されている。

その後、藩の大目付となり維新後は小参事、権大参事など勤めた。簡司の父は藩の表用人(家

老・中老の次に位する地位)

で藩校「養老館」の承官(事務局長)を勤めていた。

廃藩後、多くの藩士は職を失い、今後の生き方を模索していたが、永弼も同様、齢三十四歳にして意を決し、他の藩士と共に上京、取り敢えずドイツ学義塾塾監に収まるが思うところが有り帰郷、美濃郡役所書記となる。明治五年(一八七二年)に大阪へ出てガラス工場を経営するが所謂武士の商法で失敗に終わり帰郷、書を良くした為書道塾を開く。

当時森鷗外も塾生の一人であった。この事は「つわぶき」二十八号で、林量三氏寄稿の「鷗外」一番「忠恭」二番に鷗外が書道家山田簡司に学ぶとある。この記述が後に札幌ご在住の簡司(永弼)のお孫さんに当たる山田親成氏との交友の端緒となる。

明治二十九年、永弼五十七歳の時、次男珪助の屯田兵応募に同行し北海道への移住を決意した。

入植後、いち早く水稻栽培に着目し、明治三十一年(一八九九年)八月から一年に亘り独力で内地の府県や、道内の各地をまわり、水稻栽培と水利施設の調査を行う。

この調査に基づき灌漑施設の必要性を屯田兵大隊本部や地元農場関係者へ要望、これにより組合が結成され大正用水が完成した。明治三十六年一月からイチヤン農協の会長となり後進の指導に当たった。

翌三十七年十月、六十六歳を一期に激動の時代を駆け抜けた生涯を終える。

永弼夫婦の墓は村内有志が功績を讃え建立した。

(注1.) 屯田兵
明治の初年に北海道の開拓に当たって明治政府が設置した。一八七四年(明治七年)政府は黒田清隆の建議による屯田兵例則を発して廃藩で職を失った旧武士から移住者を募り、これによって、北門防備、北方開拓、土族救済の目的を一挙に達しようとした。翌年当時の宮城・青森・酒田三県から九六五人が札幌付近の琴似に移住したのを最

初に、一八九九年(明治三十一年)までに七、三三七戸、三九九一人が移住して、江別・山鼻・篠路等の屯田兵村をつくり、七四・七五五町歩の国有未開地を開拓した。屯田兵村は、二〇〇〇二五〇戸を一村とし、耕地は短冊形に区切られ、住居は初期には密集形態をとったが後期には散居形態が多い。九十年以降は一般からも募集した。一九〇三年(明治三十六年)屯田兵制度は廃止されたが屯田兵村は一般移住民村として存続した。

(平凡社・世界大百科事典より)

津和野から移住したのは明治二十九年(一八九七)との記録がある。二〇〇四年に公開された映画「北の零年」では当時の北海道開拓の状況が描かれている。政府から移住を命じられた淡路福田家の家臣が立ち向かう自然との壮絶な戦いは屯田兵の当時の苦闘が偲ばれる作品であった。

(注2.) 号松園、大國隆正の門下生、国典を修める。維新後神祇官次いで宮内省、文部省に奉じる。地方歌壇の巨匠。

布施 高



益田氏史跡探訪

村田進

平成十八年度第二回史跡探訪として11月24日に益田市へ17人で出発しました。担当の潮・岡田両氏と下調査にでかけて早くから開けた益田地方には貴重な文化財が沢山有ると実感しました。中世・津和野領主吉見氏と色々と関係が深かった豪族益田氏の旧跡を尋ねて歩きました。

■妙義寺（曹洞宗）

益田氏の菩提寺で幕末・長州戦争の時、長州軍が陣を置いた寺で大きな山門も立派で、



▲妙義寺

道路で分断されているが15代益田兼堯の銅像も建てられ広大な寺域は益田氏の往時が偲ばれます。

■益田藤兼（19代）の墓

妙義寺から約三〇〇米の七尾城の南麓の谷間にあり、近くに畜舎が建ち環境は良くないが、戦国時代の領主らしいどっしりした大きな墓である。



▲益田藤兼の墓

藤兼は天文の役（一五五四）で縁戚の陶晴賢軍に加わり二万の大軍と共に津和野城を攻め囲み半年の攻防戦を繰り返

げた武将である。

■七尾城（国指定史跡）

住吉神社に参拝しその上方の七尾城に登りました。かなりの急峻で山城を作るには、うってつけの場所を選んだと思います。何層も曲輪が広がり井戸跡も有り、記録によると標高一八米、長さ六〇〇

米の城域が有りますが、三本松城の様な城壁は無い。本丸跡からは眼下に益田市街・日本海が見渡せます。大手口の方にも行きましたが、益田川の防災工事で川の拡幅によって様子が変わり、そこにあった大手門は現在医光寺の山門として移築されています。

■益田兼堯（15代）の墓

応仁の乱など数々の戦乱で武勲をたてた兼堯は、画聖雪舟を招き重文に指定されている画像「益田兼堯像」を画かせた。全盛時代を築いた武将にしては少し地味な墓が大手口の近くにあります。

■益田兼見（11代）の墓

南北朝時代から室町時代にかけて石見の豪族益田氏の基礎を作り、三宅御土居を築き万福寺を創建した兼見の墓は万福寺の側の丘の上にある。

豪族の主らしい立派なもので、益田川の側の眺望の良い所にあります。益田氏と境界を接した吉見氏とは土地の領有をめぐって紛争が続き益田兼理（14代）と吉見頼弘（5代）が吉賀荘・豊田郷・美濃地をめぐって争いが起こり、益田宗兼（17代）と吉見頼世（6代）が美濃地・黒谷をめぐって起請文を交わしたりしたが係争は絶えなかった。



▲益田兼見（11代）の墓（右）と益田兼方の墓（左）

■万福寺（時宗）

本堂は国重要文化財に指定されており、益田兼見（11代）が今の地に移築建造したと伝えられ桁行7間・梁間7間・一重寄棟造り、棧瓦葺・四方廻縁付、鎌倉時代らしい簡素

な建物です。本堂の裏手にある庭園は国史蹟及名勝になっており、画僧雪舟によって作庭されたと伝えられている見事な庭です。仏教の世界観の表徴といわれる石組は明るく伸びやかで、同じ雪舟の作と云われる医光寺の庭園と対照的と思われまます。長州戦争の時に幕府方（浜田藩・福山藩）の陣となり、市内に攻め込んだ村田蔵六（大村益次郎）指揮の長州軍と益田川を挟んで対峙して銃撃戦となり、山門は焼け落ち今も本堂の丸柱にその時の長州軍の弾痕が残っている。黒の筒袖・半袴・脚絆で新式ゲベル銃の長州軍に対して鎧冑に火縄銃の幕府軍は一方的に敗退した。



▲万福寺本堂前にて

■三宅御土居(国指定史跡)

益田氏の城館跡である。南北朝時代に益田兼見(11代)によって築造され、七尾城から益田川を隔てた対岸に築かれたのも益田川を管理し流通を掌握するためと考えられる。

以後代々の益田領主の館として栄えたが益田藤兼(19代)時代に毛利氏との対立によって七尾城に館を移したが益田元祥(20代)が大改修して下城し再び本拠とした。関ヶ原役後、元祥は長門の国の須佐に移封されたので廃絶した。居館の周囲は益田川と堀がめぐらされ東西は百九十米・南北は五十米あり、東西に高い土塁を築いた館の姿は、益田氏の力を示したと思われる。これからも調査復元工事は続くとの事です。

■染羽天石勝神社(重要文化財)

万福寺の近くにあり、現本殿は棟札写しによると益田藤兼(19代)と子息元祥(20代)が天正11年(一五八三)造営させた特異な平面を持つ、流造り社殿として一九二九年に国宝となり、戦後改めて重要文化財に指定された。

天候にも恵まれ夕刻四時には津和野に無事帰ることができました。

最後に今回の史跡探訪に際しまして、津和野町観光協会

若殿乳母召抱え

古 山 琢 磨

◎津和野亀井侯第十一代・茲監公(文久八年・一八五〇明治十八年・一八八五)に待望の若殿が誕生した。安政五年(一八五八)のことである。

※この頃の亀井家は、
▽天保十年(一八三九)四月、久留米藩主有馬頼徳の次男・頼功が津和野藩第十代藩主・命名)同年六月、第十一代を継ぐ。

▽天保十三年(一八四二)十一月、茲監、四国高松藩主・松平頼怒の次女・貢と結婚。
▽子室に恵まれず、養女(亀井勇之助茲福の女)も早世した。(生没年月日及び埋葬地不明)
▽安政五年(一八五八)、実に十六年目にして(初子)長男・功太郎生まれる。(月日不明)

のお計らいにより、益田市観光協会より貴重な資料をご提供いただきました。厚く御礼申し上げます。

▽安政六年(一八五九)六月、『津和野侯若殿乳母お召抱え』のお触れが出された。

◎若殿出生後乳が足りず、御中奥御用の乳母を段々召抱えられたけれど兎角適当でなく、非常に差しつかえているので、久佐組(※津和野藩領地Ⅱ元那賀郡金城町)の中で適当な者を見つけて差出す様に、藩庁から竹中林右衛門を差し廻らせられたので、村々で急々探し出しておいて竹中林右衛門と委細話しあつて申し出る様にと、次の条件書をそえて久佐の代官和田吉郎より触れを出している。

一、乳持女
但年齢三十歳迄の内にて病気の聞えこれなく乳も離れ乳にては相成らず、さし乳(※差乳Ⅱ吸うにつれて出る乳量の

多い婦人の乳)のもの且つ自身出産の子も息災に育ち尚又身元の処も百姓とは申し乍ら近頃の仕合せのもの或は素性分らざるものにては如何わしきに付、相成るべくは数代相続き候て当時は小さき百姓に候とも以前は相応の高も持ち居り候などと申すものの方よろしかるべく、其の余出乳の多少は勿論随分入念に差し合わされ吟味これあるべき事。尚々此の辺にて堀田子(※壘田子Ⅱ私生児)とか申して娘共出産子を育て候事もこれあり候由略々承り及び候処右様のところは相心得られ吟味これあるべく候。

尚山崎忠四郎(※日貫村庄屋)宛に特に添書として、日貫村(※津和野藩領地元邑智郡石見町)は手広でもあり乳持女二三人もないことはないだろう。その上貴村方は見渡した所人品もよく見え人氣(人の氣質)もよきように考えられるので、成るべくは日貫村で出してもらいたいと思う。

跡扶持は相応に下され猶人により、このためにあとで長く差しつかえるなどのことがあればそれも別に考え合せて十分に手当をする。而も乳母と申すものは若殿様御成長の上は生涯扶持を下さつた例もあり、決して御見捨てなき事故身の為にもなり、よくよく考え合せて探してほしい。組中へ触れを廻しては居るが日貫をあてにしているからよろしくたのむ。という特別な別紙がついている。

これに付庄屋山崎氏は色々讃談し竹中氏とも話しあつた結果日貫村代古屋(※横屋Ⅱ神主のこと)の内室(※奥様)を推薦した。その推薦書を左にあげる。

申上奉る口上覚

一、乳持女

日貫村大宮司松本求馬妻 くに 歳二四歳

但右の者儀親里八戸村(※元桜江町)渡辺為右衛門娘にて是迄患疾相煩らひ候儀御座無く当二月出生、女子猶又先に出生一女歳四歳二男歳三才三人共に丈夫に生長仕り候。右くに儀無病温順の者にて乳汁至つて沢山、さし乳と相見え候。求馬儀浜田御領長浜神職牛尾因幡守弟松本へ養子に参り申候。右は此の度乳持女御用に付竹中林右衛門様御出在なされ、仰付けられの趣畏み奉

り何とも恐れ入り奉り候。早速村内讃談仕り見候処相応の儀も御座なく候えども右くに女素性宜しく慥なるものに御座候。旁々以て万一御用に立ち候御儀にも御座候はば何とぞ差出し度く存じ奉り候。此段御聞受け下し置かれ宜しく仰上げられ下さるべく候。願上げ奉り候。

以上

未(※ひつじの年)安政六年)六月

日貫村庄屋 山崎忠四郎
和田吉郎殿

(付紙)

一、くに女渡辺為右衛門娘に御座候えども実父は浜田御領市山村(※桜江町) 鋳物師屋山根権兵衛実母同村留屋娘に御座候。此の辺に堀田子と申すことなく素性慥なる儀に付幼少の折為右衛門方へもらい受け養育致し親類松本求馬方へ縁付候儀に御座候。

診断書

一、乳持女くに女愚診仕り候処元来無病の稟受にて瘡毒肺疾耳目胸病等相煩らい候者と相見え申さず乳汁至って沢山俗に云うさし乳と申すものの一際丈盛なる者にて乳種至極宜しく相見え申候右愚診仕り

候処かくの如くに御座候。
未六月

医師 山崎見敬

※その後

▽日貫村の「くに」が正式に乳母としてお召抱えになったか否かは定かでないが、残念なことに若殿・功太郎様は翌七月十三日、早世された。
▽文久元年(一八六一)六月には長女・斐が早世。

▽慶応二年(一八六六)九月には二男・学助が早世した。

▽この三人のお子様はすべて『乙雄山』(※亀井家墓地)に埋葬されていることから、三人とも津和野でお生まれになったのであろう。このことから奥方の貢様はこの間は津和野に滞在されていたと思われる。

※茲監公は天保十年(一八三九)、十一代藩主(※亀井家十二代)を継いで以来、参勤交代で毎年の様に津和野と江戸の間を往復しているが、三人のお子様の死去の際は三度共津和野に帰城している。また、貢様は茲監公に従って江戸と津和野の間を移動されたことがあったものと思われる。

最後の参勤交代は(幕末、

維新前の激動の時期で、茲監公はこの時は京都、江戸、大坂の間を往復し活動)文久三年(一八六三)四月の帰城であるが、貢様は同年一月に帰住している。(別行動)
※貢様が津和野滞在中に銘菓『源氏巻』の名(『源氏物語』から)を付けられたと伝えられているが、何時の頃のことであったのか。

※その後の亀井家は
▽明治元年(一八六八)八月、浅野式部懋明の五男茲命を養子とする。
▽明治四年(一八七二)九月、津和野を離れ居を東京へ移す。
▽明治六年(一八七三)四月四日、貢様卒。(東京)
▽明治八年(一八七五)五月、茲命を離縁する。
▽明治八年(一八七五)六月、京都の公卿・堤哲長の三男・亀麿を養子とする。(名を改め茲明とする)

▽明治九年(一八七六)十月、茲明亀井家十三代を継ぐ。

■主な参考文献

- 「石見町誌 下巻」
- 「温故知新」横山正克著
- 「亀井茲監」松島 弘著
- 「亀井家」墳墓便覧
- 「寛延」元年御参勤
- 「幕延」元年御参勤
- 「御待受御用向心覚」

津和野奨学会・断片
河野 晃

貧しい家庭からの進学で一番の問題は、昔も今も学資の工面である。子供の頃、小遣いなるものを貰った覚えが無い、然し空腹で泣いた事は無い程の極く普通の貧乏家庭。戦前の育英制度は未熟で、誠に狭き門であつたらしい。

津和野では旧制山高、九大に進学は一つの選択だが、是を断念する危機を脱するを得たのは「津和野奨学会」の存在であつた。

毎月十五円宛を貸与頂けた事は誠に有難く、その恩恵に与かつた家族にとつて、何時までも忘れる事はない訳だ。

当時は長男が進学しても、其の他の弟妹は諦めるのが当然であつて、その事を不満に思わなかつた筈である。

「近代の津和野」に、「津和野奨学会」の記載と重複するが書かせて戴く。

菁々塾

亀井家の奨学会の起源は、明治三十九年亀井茲常伯の結婚記念事業として建設された菁々塾で、森鷗外理事長、佐伯常磨塾監、植木直幸家令が経理で運営された。塾生は津和野藩士出身だつた。潮俊一・板垣武雄・和崎武夫・村上定治・新藤寛・渡辺伊之輔・西周雄・居田秀夫(居田秀夫談) (以上近代の津和野)



▲同令夫人

▲亀井伯爵閣下

『小倉日記』

森鷗外が明治三十二年六月十六日から同三十五年三月二十八日迄の三年間、小倉軍医部長として軍務に服していた

「明治三十二年十月十三日。田中榮秀の書至る。亀井氏貸費生を銓考せんことを求むるなり。候補者を橋元昌矣となす。現に高等学校生徒たり。

其父嘗て亀井氏の家扶たりきと云ふ。」

「明治三十四年九月三十日。亀井伯家令の書到る。曰く。

旧藩人久保茂第五高等学校に入り、伯に資を借らん事を請ふ。是より先き橋元昌矣も亦第一高等学校に在りて、月に十二円五十銭を借る。今久保に十二円を借さんと欲す。可否を問ふ云々・乃ち可とす。」

「明治三十四年十月二十四日。田中、齋藤賞資を救助せんが為に、銓考内規を修正せんことを議る。答へて曰く。可なりと。是より先き亀井家の学資を津和野人に貸すこと士族に限る、此に至りて平民も亦恩典に与ることを得ること、なりぬ。」

(河野註) 田中榮秀は旧津和野藩士、弘化三年九月二十四日生。明治十八年内閣権少書記官、明治三十二年茲常伯家令(53歳)西神六郎、岡静子媒酌人、昭和六年七月七日没(85歳)

(以上「私の紐解物語」より) (河野註) 橋元昌矣は、一高、東大卒オクスフォード大留学、三鷹天文台長。父は初め爽助改名して至矣、茲監公家扶であった。因に

昭和三年四月十五日旧津和野中学校竣工式に亀井家職安野延吉と橋元昌矣も来臨した。

大正十四年県立津和野中学校建設費へ、亀井家から六万円という多額の寄付により菁々塾は廃止された。菁々の名は津和野中学校の一寮、菁々寮として残った。

此の後昭和八年迄の資料が手許に無くわからない。

津和野奨学会

亀井茲常伯を代表者として亀井家の寄付を中心に会員の寄付金を資金として津和野に縁故ある子弟へ学資を貸与した『財団法人津和野奨学会』が設立された。昭和十年から昭和十九年度位で終わった様だ。

記録によるとその恩恵に与った者は六十余名の多数に及び大学教授を始め何れも素晴らしい活動をして社会に寄与している。(六十余名は誰々か)

貸費規程の詳細は省略する。一、貸費金額は一年百八円以内とし、満七年を超ゆるを得ず。

一、卒業後一年猶予し爾後十年以内年賦返納すべし。代表 亀井茲常

理事 潮惠之輔 松本愛重

豊原清作 加藤正馨

三宅隆人 安野延吉

監事 橋元昌矣 佐々田彰夫

出資者(年賦全額省略) 出資者六十五名は省略されているが、手許の昭和九年度奨学会報告書により御芳名を書き上げて御厚志を謝したい。

出資者(年賦全額省略)

- 亀井伯爵・佐々布充重・宮崎好文・柳川真栄・小藤文次郎
- 高木虎槌・植木直幸・岸田薛夫・佐伯常磨・八杉貞利
- 高山小次郎・中山和助・豊原清作・山本助一・清水格之亮
- 柳田清一・西村稠・齋藤秀雄・吉村銀次郎・宮崎喜佐次
- 大屋道雄・中村吉蔵・豊田中也・潮惠之輔・齋藤安之助
- 牧野鹿輔・橋元昌矣・安野延吉・松本愛重・福羽真城
- 佐々田彰夫・田中秀介・佐々田英敏・佐々田懋・阿部方輔
- 齋藤誠・羽田如雲・新孝之輔・竹内浩・梅尾十七生・橋元文治・中井一夫・沢田速介
- 青木美真・齋藤城男・岩本岩城・湯浅温・田原久吉・齋藤章一・宮本久米太・平手剛蔵
- 山名重正・永見喜市・岩田藤吾・森於菟・多胡要・小川恒次郎・中村佐市・望月幸雄
- 岡村実衛・矢田久利・村

上米十郎・三宅隆人・潮道佐・高岡直吉・江上堯衛・加藤正馨

以上合計六十七人

物故者遺族(年賦出金中)

- 森林太郎・村上典表・田原榮
- 潮恒太郎・増野悦興・田村登
- 羽田福太郎・中井千尋
- 堀興市・水崎保佑・堀野春直
- 菜順平次・今井惇・齋藤俊次郎
- 山辺丈夫・宮崎幸磨
- 新万之助・新井宣哉・佐伯利磨
- 松本鷹近・田中榮秀
- 水津謙介・小柴博・横山喜雄
- 齋藤賞資・片寄雄
- 水津政亮
- 大谷六十三
- 山路忠恭
- 水津嘉之一郎
- 赤川逸庸
- 増田齡造
- 青直樹
- 原田虎雄
- 西神六郎

以上合計 三十五人

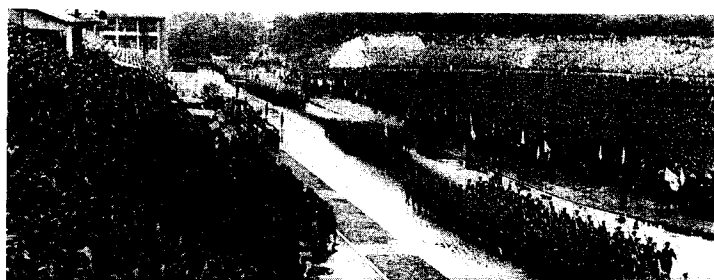
通計 百〇三人

(三〇三二〇円)

貸費者(氏名省略)

通計 四十六人 以上。

大正五年度の貸費生の中に東京医科大学生中田瑞穂の名が見られる。瑞穂は明治二六年四月二四日中田和居(医師)で日露戦争下津和野町長を勤め城山を亀井家より貸与を受け町民の為に植林した功績)の三男として津和野町新丁に生まれた。明治四十年津和野



▲神宮外苑競技場

小学校を首席で卒業するが、名誉町長の父が私財を抵当に入れ町政に尽瘁し五十四歳で死去した際に残されたのは借財だけの有様。十四歳であつた瑞穂は立志上京し暁星中、六高から東京帝大医学部に進学。やがて新潟医大教授、医博、名誉教授、文化功労者。昭和五十年八月十八日没、八十二歳。

昭和十七年潮惠之輔理事長の際にこの恩恵に浴した者も昭和十八年十月二日「在学学生徴兵猶予の停止」特例公

布した東条英機首相は、十月二十一日に神宮外苑競技場で出陣学徒壮行大会を挙行し、全国中等学校代表も参加を強制されたものであった。

十二月一日第一回学徒兵が入隊する。大多数が甲幹乙幹に採用、速成して前線に送出される。九ヶ月後には南海の藻屑と化し、戦後一枚の紙切れとなつて帰還した。

然し乍ら多くの方々の善意に生かされて若干年を最高学府に身を置くを得た満足を偲ばずばなるまい。ただ感謝。さけはてしなき

わたつみの声

(附)「菁々塾」の創設廃止に拘わらず「授学会」は活動している。授学会の歴史は明治初期迄遡るのではないか。

参考文献

近代の津和野 (岩谷建三)
私の紐解物語 (林 量三)



杉片河

沢川 兼光

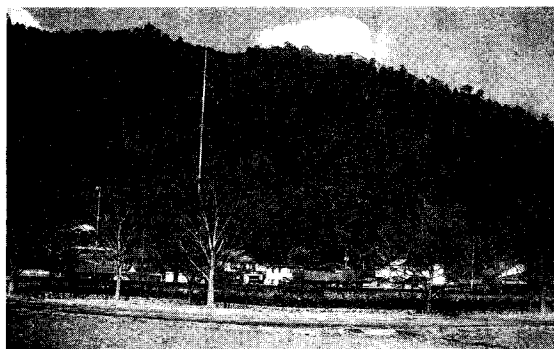
片河は大字後田の内である。その昔、この河岸の台地には鬱蒼と杉木立が立ち並んで、後方の城の麓の内郭を隠す軍事的役目をしていたので、杉片河と呼ばれたのだという。鷺原上市からこの地帯は、城山麓で、いわゆる山下と呼ばれる城郭に近接した軍略的にも重要な居住地であったことだろう。近世に入ると、自らその意味合いは薄くなつても上市から杉片河にかけて河岸は高い石垣に囲まれて筋違橋(常盤橋)まで続いていたことを思うと、単なる防水の護岸だけでない中世の山下の軍事的名残を止めていると思わざるを得ない。

後田が随分広い地域に渡っているのは、吉見時代の城の大手が西の喜時雨に向き、搦手の東側は殆ど水田であったことから生まれた村名で、現在のように殿町、本町を含めた広い地域をすべて後田と言うようになったのは廃藩置県後であつて寛永検地後に後田と呼んだ地域は、田畑山林を含めたもつと狭い地域であつ

たようである。

鷺原上市から杉片河が高い石垣で、しかも大きい芝土手に囲まれながら筋違橋まで来て終っているのは何か重要な構えがあつたのであろうかと津和野町史の中でも指摘されているが、杉片河と続く清水町の町屋敷が完成したのは、早い時期で、それは宝永四年(一七〇七)、新橋が架けられる以前であつたであろうと述べられている。

僅か三、四十年の歳月の間



に、常盤橋の兩岸の景観も随分変つてしまつた。変つたというより昔の風情がすっかり失われてしまつた。常盤橋をはさんで兩岸に亭々と聳えて

いた老松の姿が、先ず右岸の方から先に姿を消してしまつた。護岸整備のためではあつたのだろうが、その長い生長の歴史と共に消えてしまつたのである。左岸の一つだけは残っていたが、これも倒れてしまつてもう十年以上にならう。さらにもう一つは、左岸の野村家下手に、「お舟入り」と呼んだ藩の舟置場の設備が岸に広い口を開いていた。しかしこれも護岸工事の際に閉されて今は狭い水路が一つ通っているだけである。杉片河のここらまで来ると上市通からの二間半道路や「馬廻屋敷」を北に流れて行く水路や途中で岐れて御菜園所(現稲成神社駐車場)を潤しながら舟置場から津和野川に流れ出る水路と道路に沿つて御館(藩邸)に流れ込んで行く水路と賑やかになつて、その水路が常盤橋を渡る袂で立体交差しながらそれぞれの方向に流れるのを見ることが出来る。

いづれにしても西側の山手には「馬廻」「徒士」の侍屋敷が並び、川に沿う杉片河は「御手廻組」とか「長柄組」「持筒組」という侍達の屋敷が並んでいて、日中こそ人の

往来があり、動く姿も見えようが、ひとたび日没が来ると静かな川の流れの音と背後を鬱蒼と覆う杉森のため、漆黒の間となり、随分さびしい杉片河であつたらしい。そのよな片河の夜でも、秋から冬にかけて蕎麦店の屋台は廻つたものらしい。

昭和三十年頃、筆者は鷺原清水に住んで近所の江川ミツ老嬢から聞いた昔話である。当時ミツ老嬢は八十歳余、耳はまだちゃんとして衰えがなかつたが、眼は緑内障の兆候があり不便であるらしかつた。ミツ老嬢と筆者の母方の祖母は従姉妹でもあつたので、いつも何となく親近感をもつていた。そのミツ老から聞いた杉片河の化け物語である。

——ある秋の霧の深い夜半、すっかり夜が更けてしまつて慌てた蕎麦屋が、屋台を曳きながら杉片河の道を帰途に着いていた。途中で小用を催したので提灯を屋台の格子に掛けて道端まで歩いて行つて用を果たし、ふと前方の霧に目を移すとその中にいた人影が霧の中で見る見る大入道雲となつてゆくではないか。あつ、これは話に聞いていたしだい、

だかの化け物だ、と気がついた瞬間、蕎麦屋は屋台も放り出し、提灯だけ手にとると反対の方向へ駆け出していた。と、蕎麦屋と杉片河の化け物譚はこれくらいであるが、どうも杉片河の化け物話は他にもまだあるようであったが、特別具体性のない話は、杉片河の夜がそれくらい陰気臭いということであるらしかった。それとこの化け物は、みんなしだいだかにきまっているような話であった。

筆者は幼時、周辺の年寄りの間で育つたため、しだいだかという化け物の話はよく聞かされていた。自分の前に突然現われて、見上げると見上げるほど、ずんずん大きくなって大入道になるから、しだいだかに逢つたら見上げない方がよいということまで聞いていた。江川のばば様の話は、それだけであったから何時か忘れてしまった。ずっと後年になって、読んでいた本の中で、「プロッケンのお化け」という話に出合った。それは山頂などで、太陽を背にして霧に向かったとき、観測者の影が霧に映ってできる光の像で、ドイツのプロッケン

峰でよく見られるのでこの名が出来たというのである。忘れていた杉片河のしだいだかの話を思い出した。あの屋台の蕎麦屋は自ら「プロッケンのお化け」の体験者であったのかと独り笑いを禁じ得なかつた。今の中座を永住地として住むようになり、もう四十三年になる。ありがたいことに背戸縁から四季朝夕の城址を仰ぐことが出来、城山の新緑から紅葉までの多彩な表情も楽しませてもらえる。しかし何よりも圧巻は秋の霧の頃であるろうか、特別霧の深い朝は、城址の石垣だけが照り映えて他は隠され、まるで中世だけがクローズアップされているようである。美しい。

「岩戸」(天の岩戸、磐声ともいふ) 石見神楽の中で最も神聖視されている演目であり、神話の中に浸透しきるに相応しい。

石見神楽「岩戸」観賞 田中とよし

はじめに

石見神楽は石見地方で起こり舞われた神楽のことで、石見人は普通「舞」と呼んでいる。舞は各地の神社祭礼の前夜祭に催されていたが、昨今では各種イベントにも行われるようになり年中楽しむことができるようになった。もともと神楽は神話や説話を素材としているので、庶民の芸術としては難解で堅苦しいものであった。そのため石見神楽も何回かの台本改訂を見られる。現在の劇本位より舞本位のしかも石見人の性格や気性によく適合させて八調子の太鼓に代えられていった。

「岩戸」(天の岩戸、磐声ともいふ) 石見神楽の中で最も神聖視されている演目であり、神話の中に浸透しきるに相応しい。



素戔嗚命が天上においていつも粗暴な振る舞いをするので、ほとほと困り果てた天照大神はついに天の岩戸の中にお隠れになった。そのために、高天原は常闇となり神々は憂愁の極みに閉ざされた。天児屋根命は太玉命と相謀り、天の八州川に神々が集い合議の末、岩戸の前で祝詞を奏上し、長鳴鳥を鳴かせ、天宇津女命を浮き船の上に舞わせて、八百萬の神々は高天原を揺すって笑った。岩戸の中の大神は、この催しを何事かと怪しんで、そつと隙間から垣間見ている。岩戸を引き開けて大御神を迎えだし、世が再び明るくなったという筋である。

で、その上で足を踏みならして乱舞する。踊り狂っているうちに、衣服は乱れ、次第に紐も解けてついに裸身をのぞかせるという名演技をする。八百萬の神々も一斉に笑い転げ、高天原は時ならぬ陽気に満ちた。こうして天照御大神を天の岩戸から無事に呼び戻すことが出来たのである。

この舞は児屋根命が翁舞、太玉命は神舞、大神と宇津女命が女舞、手力男命は荒舞というように、それぞれの舞方が組み合わされている。宇津女命は厳肅に舞う大神とは対照的な女舞で、足を床に叩きつけるように舞う。児屋根命と太玉の命は大神が岩戸に籠もられて世の中が真つ暗闇となつているため、身体を前に倒し、手探りの状態で舞う。最後の喜びの舞は楽しく四人揃って美しく舞われる。

「各命の役割」

天照大神 太陽神であり高天原において中心的な存在の女神。高天原を支配。

天児屋根命

天照大神の侍臣として仕え美声の持ち主。

太玉命

天の児屋根命とともに祭祀を司る神で、職掌がら太玉串を捧げたことから、その名がある。

宇津女命



▶ 児屋根命

顔は福々しいお多福型で、いわゆるおかめの面のような神である。

手力男命



▶ 手力男命

高天原一番の力持ちの神。名の由来もここからくる。

その大力を見込まれ天の岩戸を引き開ける役目をする。

『出掛け歌』

先ずは岩戸のその初め、隠れし神を出さんと、八百万の神遊び、これぞ神楽の始めなり。

『口詞』

児屋根

自らは天照御大神に仕えまつる天の児屋根の命なり。

この程皇天御神の御弟須佐

之男の命、種々の悪しき業

をなし給えば、皇天御神は

御怒りまして、天の岩戸を

さして閉じこもらせ給えば、

高天原は皆暗く、天の下悉

く暗し。これによりて天の

諸々の事、燭を灯してわき

まうるより他なく、荒ぶる神の音なく五月蠅なす皆わき、萬の禍事ごとごとこりて、如何にともすべき様もなく、悲しきかなや、如何にせん。この処に天の太玉の命おわしまさずや。如何に。太玉の命急ぎお出なされ候え。

太玉

自らを召され候は、天の児屋根の命にてましますや。こは又何条何事にて候や。

児屋根

(事の次第を話す)

太玉

(指図するように言う)

児屋根

さらば天の金山の真金を取りて、石凝姥の命に仰せて、日の御形の鏡を造らしめ、天の目一箇の命に仰せて、

太刀、斧、又さなぎを造らしめ、天の日鷲の命に仰せて、

白幣を造らしめ、天の長白羽の命に仰せて、

青幣を造らしめ、天の櫛明玉の命に仰せて、

八尺の曲玉の五百箇の御統の玉を造らし

め、又天の香具山の五百枝真神を根こじにこじて、か

の神の造らせ給う種々の物

を上つ枝、中つ枝、下つ枝

に取りかけて、太玉の命、太幣帛と捧げ待ち給え。我

は太祝詞言をもてねぎ申し、神ほさぎにはさがばやと存

じ候が、こは如何あるべく候や。

太玉

こは奇しく妙に謀らせ給うものかな。さらば彼の神々に仰せて仕えまつらしめん。

又手置帆負の命、彦狭知の命に仰せて新宮を造らしめ、

天の棚機姫の命に仰せて、神御衣を織らせ申すべく候が、こは如何あるべく候や。

(児屋根と太玉天の岩戸の前に急ぐ)

児屋根

急ぎ候程に天の岩戸の御前に参り来て候えば、この処に燎火を焚き上げ、常夜の長鳴鳥を集えて時を作らしめ、天の手力命を岩戸の戸脇に隠し立たせ置き、天の宇津女の命に仰せて、神遊びを仕えまつらしめん。汝命、天の宇津女の命をこの処に御召しなさるべく候。

のかづらを櫛にかけ、天の香具山の笹葉を手草に結び、手にさなぎ着けたる矛を持ち、うけ伏せて踏みとどろ

こし一二三四五六七八九十

百千万と歌いつつ神遊び仕

えまつらん。

(宇津女舞う。手力男勇壯

に舞う。その内手力男岩戸

を開き天照大神を迎え出す)

児屋根

各種々の神業を仕えまつり

て候えば、やや御心も和ぎ

て候程に、我ら二柱は日の

御綱を掛け廻らして、皇天

御神を新宮に遷しまつらん。

天の手力男の命は御門を守

り給え。天の宇津女の命は

大御前に仕え侍い給うべく

候。

『喜びの舞歌』

あら面白やと、神の御声の妙

なる始めの物語、思えば伊勢

と三輪の神、一体分身の御事

は、今更何と岩倉や、この関

の戸の夜も明け、かくありが

たき神遊び、さむるや名残な

るらん。

天の戸を開いて月の夜もすがら

静かに拝む天の岩戸を

庭つ鳥かけなかしめて笹葉振り

遊ぶさ庭に朝日直刺す

天の戸は静かに開けて 神路山

杉の青葉に日影さす見ゆ

伝えきく天の岩戸も憊ばれて

暁きよし伊勢の神垣

おわりに

石見神楽は老若男女誰でも

楽しむことが出来る唯一の娯

楽であり、見ているだけで分

かる芸能でもあるがその舞(

演目)のもつ意味が分かれば

更に面白さは倍増しよう。

面は当初木彫りの面であつ

たが、濱田の奥市木の人が張

り子の面を考案し、やがては

長浜の人形師達が今のような

綺麗な面に仕上げていった。

現在津和野町では神楽社中

が他地域に比して少ないのが

残念であるが、最近町内のF

氏が子供達に舞の手ほどきを

して下さったり、旅館組合が

観光客に神楽を楽しんで貰う

仕組みを企画されたり、なご

みの里では毎月二回石見神楽

を各社中交替で演じてもらつ

ている事などによって、神楽

がこの地域にも深く浸透して

行き、広く全国に認識される

であろうことに神楽面を製作

している自分にとっても最も

嬉しく、且つ幸せに思ってい

るところです。

参考文獻

口詞「校定石見神楽台本」

特別寄稿

鷺原八幡宮流鏑馬について

津和野流鏑馬保存会

会長 吉岡茂太郎

鷺原の流鏑馬馬場は、鷺原公園の一角で、構築は室町時代(將軍・足利義昭)の永禄十一(一五六八)年、時の津和野城主・吉見正頼が、鷺原八幡宮の造営に併せて鎌倉八幡宮の馬場を模して造つたものと伝えられている。

嘉永二(一八四九)年、亀井家十二代茲監により、大修理が行われたと記録されている。

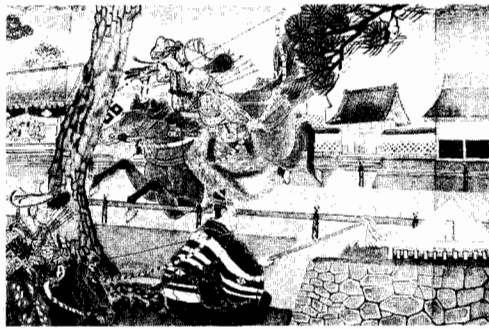
地形に併せて、八幡宮に対して横馬場となっているのも特有なものである。

馬場の規模は長さ南北に、約二百五十米で、中央部の幅は約二十七米、長方形をなしている。南北に走る一条の中堤があり、東に面して、三ヶ所に馬場が設けられている。

こうして構築された馬場が往時の形を完全に残していることで、日本唯一の貴重な文化遺産として、昭和四十一(一九六六)年、鳥根県指定史蹟となっている。

鷺原八幡宮流鏑馬神事は、

古い記録(※「神事流鏑馬聞書」、「以曾志乃屋文庫」)によると、小笠原流であるが、流入の経路や年代等の文献に乏しく、詳しく判明しないが、何れにせよ、天下泰平、五穀豊穰を祈願する神事として、徳川時代盛んに行なわれていたことは、八幡宮に奉納されている数多くの額面によって明らかである。



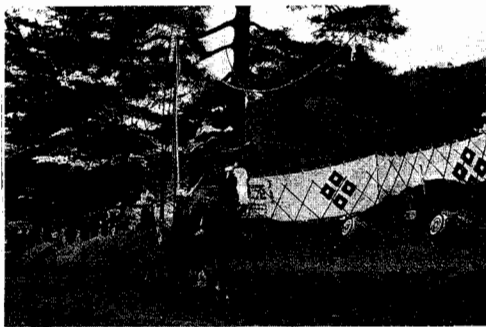
▲藩政時代の流鏑馬 (栗本格齋: 画)

明治以降、流鏑馬の継承者もなく、復元することも難しかったものと思われる。

昭和三十二(一九五七)年、

四月、津和野弓道会の会員同志により、歩射流鏑馬を起し奉納している。その後地元青年有志により再び復活の話が持ち上がり、津和野弓道会の援助指導により、八幡宮春の例祭の時、行うようになった。

その当時の服装は、狩衣にわらじ履きで、綾蘭笠、弓矢を持って、射手としての身を固め、農家に飼っておった農耕馬に乗って、的場に作つた的を射るといふもので、正式な作法になつたものではなかつた。



▲昭和40年代の流鏑馬

それでも一般町民より非常に喜ばれ、次第に流鏑馬馬場の存在も認められ、保存に力を入れると共に、是非共、古

式に則つた流鏑馬を復活したいという願いが年々募つて来たのである。

八幡宮の宅野宮司との御良縁に依り、昭和五十一(一九七六)年二月、小笠原弓馬術礼法教場三十世範士、小笠原清信(当時明治大学教授)ご夫妻が、兼ねてより希望であつた鷺原八幡宮参拝をかねて、馬場の見学に来町された。

その時、目前に拡がる馬場をそのまま残しておることと深く感嘆され「ここで古式流鏑馬を復活しよう」と、話がまとまつたのである。

以来地元青年会、津和野弓道会、当時の関係有志等が約二ヶ月間、東奔西走して、装束、道具の新調、馬の調達をはじめ、諸役の礼法や技法の習得等の研修も重ね、遂に同年四月十三日、鷺原八幡宮例祭の当日、小笠原宗家三十世当主・清信範士以下門下生の来場を見、小笠原家に伝わる鎌倉時代の装束、武器に身を固めた流鏑馬射手、総奉行、諸役により、古式に則つた流鏑馬が、いとも厳肅に執行された。

以来小笠原宗家の御師範と同門先輩諸氏の御教導のもと、町民各位の御支援、御協力により、年々その成果も実り、平成八年四月、津和野町教育委員会より「津和野町指定無形民俗文化財」の指定を受けた。さらに平成十三年度、津和野町において、流鏑馬の諸役の装束整備事業を取り上げられ、補助金の計上を見、装束の更新をすることが出来た。

現代の小笠原宗家の当主は三十一世清忠氏で、嫡男の清基氏とともに、毎年御来駕になり、御指導を賜つておるところである。

保存会会員一同、わが町にある尊い文化遺産を生かし、伝統行事として、伝承して行かねばならないと決意を新たにしておる現状である。



▲流鏑馬射手の雄姿 (現在)

馬場の設備

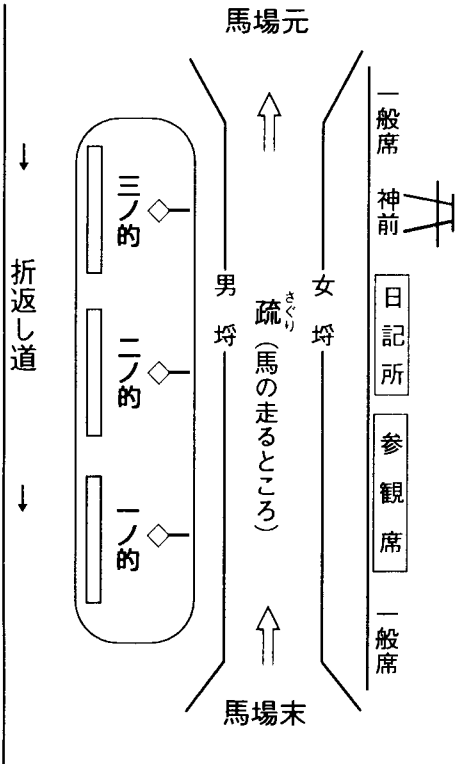
馬場の長さについては、はじめに述べた通りであるが、

次に示した略図によって説明する。

◎馬場の長さは総長約二百五十一米で馬場の両端を馬場末、馬場元に向つて走る。双方に大幕を張る。男埒と女埒を作り、その間を疏と云い馬の走る道である。砂を入れて走り易くしてある。

◎馬場割りと云つて一の的まで約三十一米、二の的まで約七十六米、三の的まで七十六米、留口まで約三十五米の長さで割る。

◎的場
的場は、一の的、二の的、三の的と三ヶ所設け、的場の中央に高さ約一・五米の竹で作った竹串を立て、的板を挟む。



的板は流鏑馬射手用と、騎射挟物射手の二種を用意する。流鏑馬射手用は、約五十四種角、挟物射手用は約四十五種角であるが、材料や作成の都合で同じ大きさの的板を使用している。竹串に挟む的板の木目は、向かつて左の方向に流れるように挟む。的奉行は一つ一つ確認する。

馬場の中央に一段と高く設け、三方に幕を張る。日記所には、当日流鏑馬を司どる役付(神職、総奉行、日記役、童女、幣振、控の諸役)が着座し、指揮をとる所である。

◎師範家
小笠原弓馬術礼法教場(小笠原流宗家)

◎射手(十数人)
流鏑馬射手、騎射挟物射手で、流鏑馬射手は三騎をたて、鎌倉時代の武士の狩装束をつけて、約二百五十米の馬場を、馬を駆けさせながら、三つの的を次々に射る。

◎総奉行(一人)
当日の総指揮者である。

◎日記役(一人)
当日の記録を流鏑馬日記に記述する。

◎馬場末役、馬場元役(各一人)
馬場の両端に位置して、それぞれ馬場の中央までを監視し、馬場の状況等をよく見極めて、射手に対して発進の合図を行う。

◎的奉行(三人)
三ヶ所の的場にそれぞれ一人付き、采揚、矢取り、的持ちを指揮し、それぞれの場の整備等について監督し責任を持つ。

◎采揚(三人)
射手の射った矢の中り、外れを知らせる役である。

◎矢取り(三人)
射手の射った矢を拾うのを務めとする。

◎的持ち(三人)

射手の射った的板を整理し射手毎に、新しい的板と取り替える役である。

◎弓袋差(三人)
射手の替弓を持つ役で、鍔直垂をつけ主に従う。

◎童女(二人) 童子(三人)
日記役、各射手について、それぞれの世話をする役。

◎馬方、口取り(数人)
馬の全てを司どる。

◎警備役、総務係等
以上馬場の造りや、流鏑馬執行上の主な諸役の呼び名と、それぞれの役目について述べたが、不十分であることについては、お許し願いたい。

◎流鏑馬の開始
先導、神職、先駆、幣振、総奉行、日記役、童女、馬場元役、馬場末役、一の的役(的奉行、采揚、矢取り、的持ち)、一の射手、口取り、童子、弓袋差、の順に二の的役、二の射手、続いて三の的役、三の射手、後駆の順に行列立てをする。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎社頭の儀
宮司以下伶人並に総奉行、的奉行、日記役、各射手、弓袋差、童子、童女、が拝殿に進み祭儀を行う。

◎宮司祝詞を奏上し、次に総奉行祭文を奏上する。宮司、総奉行玉串を奉り、拝礼。射手は御神酒を拝戴し、弓矢を授かる。

◎馬場入りの儀
射手が乗馬し、神職が馬場を修祓するのに従い行列を組んで馬場末に至り、再び馬場元に向う。射手は下馬。

◎馬場入りの行列立
先導、神職、先駆、幣振、総奉行、日記役、童女、馬場元役、馬場末役、一の的役(的奉行、采揚、矢取り、的持ち)、一の射手、口取り、童子、弓袋差、の順に二の的役、二の射手、続いて三の的役、三の射手、後駆の順に行列立てをする。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

◎流鏑馬の開始
総奉行は、諸役をそれぞれ定位置に着いたことを確かめて、日記役に対して流鏑馬開始を命ずる。

射手は再び乗馬して馬場末に向かう。

○合図扇

馬場元役(白い扇)、馬場末役(赤い扇)は相対し、馬場を点検し、準備の完了したことを見届け、互いに扇を高く揚げて合図を送る。

○揚扇の儀

一番の射手は乗馬装具を改め馬を進め、扇を開き、馬を乗り入れながら扇を天空高く投げ、馬場に駆け込み「インヨウ」と大声を発しながら矢番えをなし、一の的を射、直ちに矢を箆より抜き取り「インヨウ、インヨウ」と声を発しながら矢番えをして二の的を射、続いて三の的を射って、馬場元に入り馬を止める。二の射手も同様、合図扇により馬を乗り入れ、一、二、三、の順に的を射て馬場元に入り馬を止める。三の射手も同様に行う。流鏑馬射手の三騎が終わったら引き続き騎射挟物射手(平騎射)が交代して行う。

平騎射の射法と装束

射胴着という着物に袴をつけ、射籠手をさし、黒足袋を

はき、騎射笠を頂く。

矢は神頭矢(流鏑馬の鏑矢の雁又をとり、鋏をさしたものを)を四本用い、三本を腰帯にはさみ、一本を弓に持ちそえて出る。

射法は流鏑馬射手と同じように、一の的、二の的、三の的、と射終わって、馬場元に入り馬を止める。

退場

流鏑馬射手、騎射挟物射手が全部終わったら、馬場末に集まり、馬場末、射手、弓袋差、が行列立をして社頭に向かう。途中一の的付役、日記所の諸役が合流して社前に向かう。

総奉行の合図で、神前に一拝し、総奉行のねぎらいの言葉を頂き、一同互礼して装束をとく。

以上流鏑馬実施の流れを簡単に述べたが、毎年四月の第二日曜日を執行の日に当てているので、是非ご観賞下さい。

参考資料

- 騎射の基本と稽古 (小笠原教場)
- 郷土石見 第八号
- 津和野町史 第一巻
- 流鏑馬絵図 (以曾志乃屋文庫)
- 神事流鏑馬聞書

流鏑馬豆知識

馬場入りの行列立



- (職持ち)
- 先駆
- (幣振)
- 総奉行
- 日記役
- 童女
- 馬場元、末役
- 的奉行
- 采揚
- 矢取り
- 一の射手・馬
- 口取り
- 童子
- 弓袋差
- (二の射手)



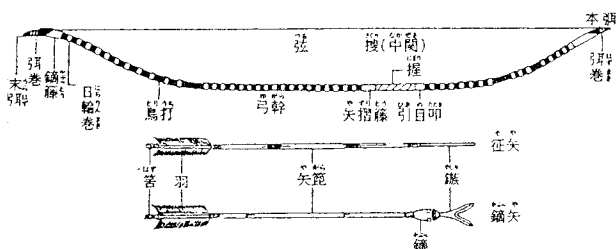
▶流鏑馬保存会の射手が、小笠原流の門人から木馬で指導を受ける



- ①綾蘭笠(あやいがさ)
- ②鎧直垂(よろいひたたれ)
- ③前差(まえざし=小刀)
- ④弓懸(ゆがけ)
- ⑤箆(えびら)
- ⑥鞭(むち)
- ⑦行膝(むかばぎ)
- ⑧鏑矢(かぶらや)
- ⑨射籠手(いごて)
- ⑩重箆(すげどう)の弓
- ⑪弦巻(つるまき)
- ⑫太刀(たち)
- ⑬物射沓(ものいぐつ)

■流鏑馬射手装束■

②鎧直垂に⑨射籠手をつけ夏鹿毛(なつかけ)の⑦行膝と⑬物射沓をはく。頭には立烏帽子に①綾蘭笠をいただく。③前差と⑫太刀を佩き、右手に⑥塗鞭を持つ。⑩重箆の弓と⑧鏑矢を携え、鏑矢五筋を盛った⑤箆を腰に付ける。この装束は「あげ装束」ともいわれ、鎌倉時代の上級武士の「狩装束」である。



弓 矢

「弓」弓には単純弓・強弓(こわゆみ)などがある。弾力を強めるため箆などを巻いたものが強弓(重箆=しげどう=の弓など)。日本の弓は中央やや下に握りがあるのが特徴である。「矢」鏑矢=矢筈の先の鏑として雁股(かりまた=刃先が又の形に開き、内側に刃のあるもの)をつける。神頭矢=流鏑馬の鏑矢の雁股を取り、鋏をさしたものを。



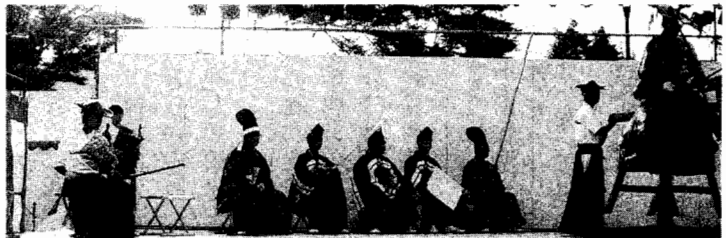
「騎射挟物射手装束」

(騎射挟物とは江戸時代のやぶさめの別称)

流鏝馬射手の装束を簡略にした「平騎射」用の服装である。④射胴着(稽古着)に、②射籠手と小袴をつけ、黒足袋をはく。頭には①騎射笠をいただく。⑤弓は単純弓(並みのもの)で、矢は⑥神頭矢、腰(袴の帯)に差す。

たたらやぶさめ
讚流鏝馬ヲ 銀川草石作
 きゅうえん えんか たけなわ
 旧苑ノ煙花四月閑ナリ
 きしん きんしゅうまう
 騎臣ノ錦繡耀トシテ鸞ノ如シ
 たらま しやぎょうじん わさ
 忽チ観ル射御風神ノ技
 まさ こ ばらまんせいとく よろび
 正ニ是レ八幡盛徳ノ歎

- ① 騎射笠(きしやがさ)
- ② 射籠手(いごて)
- ③ 弓懸(ゆがけ)
- ④ 射胴着(いどうぎ)
- ⑤ 弓
- ⑥ 神頭矢(じんとうや)



▲毎年夏に開催される「つわの
 鯉・恋・来い祭り」に参加。
 小笠原流による「流鏝馬射法」
 ◀流鏝馬の幟旗

流鏝馬保存会
 古山琢磨

★本会へのご寄付

三千元 小路喜之様 (大阪府太子町)
 五千元 沖本博様 (千葉市)

有難うございました

編集後記

何となく天変地異を予感させるような、雪が見られなかつた冬のまま春が到来しました。

他所では決して真似の出来ない鶯舞、乙女峠まつりと並

史談会

(津和野の歴史の勉強会)

日時 4月2日(月) 午後1時30分～
 会場 津和野町民センター(会議室)
 テーマ 「津和野亀井記」と「岡村素介」の周辺
 解説 河野晃氏

んで当町の三大まつりの一つである鶯原八幡宮の流鏝馬神事も間もなく四月八日(日)に行われます。
 今年のように変則的な天候であれば尚更「春には春の花が咲き」の言葉の通り、あの爛漫たる桜花の下でこの行事が催されることを願わずにはおられません。

この三十九号には、このよ
 うな祈りの気持ちをかめて、
 やぶさめ保存会の吉岡会長様
 から特別のご寄稿をいただき
 ました。今までこの行事に関
 して、役柄、名称、順序等、
 しきたりについての詳しい解
 説書を眼にする機会が無かつ
 たので時期を得たものと喜ん
 で頂けると思います。

この会報を片手に拝観され
 るならば、又ひとしお興味を
 増すと思われれます。

古式豊かなこの流鏝馬を観
 たいと毎年のように百名近い
 常連の外人客も来町され、国
 際色もたつぷり帯びています
 ので、身振り、手振りの民間
 即席ガイドも出てくれば、尚
 楽しい行事となることでは
 しょう。
 (岡田・記)